

小・中・高等学校12年一貫教育課程の開発(6)

| | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|
| 片上 宗二 | 深澤 広明 | 湯澤 正通 | 吉田 裕久 | 松浦 伸和 |
| 小山 正孝 | 磯崎 哲夫 | 吉富 巧修 | 松岡 重信 | 福田 公子 |
| 原 正寛 | 岡崎 誠司 | 赤井 利行 | 宮本 泰司 | 神津 弘之 |
| 木下 伸生 | 緒方 満 | 國清あやか | 西 敦子 | 大後戸一樹 |
| 新治 功 | 土本 勝彦 | 西原 利典 | 高田準一郎 | 砂原 徹 |
| 河野 芳文 | 内海 良一 | 由利 直子 | 原 寛暁 | 森長 俊六 |
| 壇 泉 | 一ノ瀬孝恵 | | | |

はじめに

小・中・高等学校12年一貫の教育課程の開発をめざして出発した本研究も、最終年度を迎えた。

当初は、3年間の計画であった。しかし、研究のスケールの大きさゆえに、計画を修正し3年間延長して、研究を継続することにした。

本稿のⅠでは、全教科についてこれまでの研究内容の一応の総括を試みている。

本稿のⅡでは、これまで取り上げられなかった「総合学習」について、小学校と中・高等学校に分け、その基本的な考え方と学習の実際についてやや詳しい報告を行っている。

なお、小学校のみあるいは中学校のみにしか設置されていない教科を除くすべての教科の12年にわたる一貫した教育課程の詳しい報告については、すでに前号までに掲載しているのので、そちらを参照願いたい。

Ⅰ 各教科における12年一貫教育

(1) 国語科

小・中・高等学校12か年一貫教育課程の開発を進めるために、国語科では、それぞれ独自に編成されていた教育課程を、12か年の連続性、系統性、発展性の観点から見直すことから取りかかった。この共同作業を通して、学習内容やその習得時期を再考する必要があることが予想されていた。

研究の成果は、「領域別12か年一貫指導事項表」と

して実った。国語科の教科内容の「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと（文学的文章）」、「読むこと（説明的文章）」、「言語事項・書写」について、それぞれ表を作成した。

ひとつひとつの表には、その領域の「指導事項」を細かく具体的に列挙し、それがどの時期に（小1から高3までのどの学年で）指導されるべきかを明示した。

但しこの表は、共同研究にあたった個々の教官の経験則によって成っているのので、その妥当性については、授業や調査を通しての検証をまたねばならなかった。

「領域別12か年一貫指導事項表」の作成過程において、学習者の思考（思考方法）、自己認識、世界認識について、小学校段階（12か年の前半6年間）と中・高等学校段階（後半6年間）にギャップがあるのではないかとということが話題になった。

そこで、その質的転換がいつ頃なされるのか、その質的転換を国語科としてどのように図ればいいのか、ということが新たな問題として持ち上がってきた。

それを探るために、同一文章（説明的文章）を異学年（小5～高2）の学習者に読ませ、筆者の主張や要旨に対する感想や意見を書かせることを試みた。

学年（年齢）の違う学習者が書いた感想、意見には、自我意識、社会に対する洞察力などの差異が見られ、その分析を通して、発達段階の違いによる自己認識、世界認識の質的転換の様がとらえられるのではないかと考えたのである。ひいては、学習者の成長の実態に

Souji Katakami, Hiroaki Fukazawa, Masamichi Yuzawa, Hirohisa Yoshida, Nobukazu Matsuura, Masataka Koyama, Tetsuo Isozaki, Katsunobu Yoshitomi, Shigenobu Matsuoka, Kimiko Fukuda, Masahiro Hara, Seiji Okazaki, Toshiyuki Akai, Yasushi Miyamoto, Hiroyuki Kozu, Nobuo Kinoshita, Mitsuru Ogata, Ayaka Kunikiyo, Atsuko Nishi, Kazuki Osedo, Isao Shinji, Katsuhiko Tsuchimoto, Katsunori Nishihara, Junichiro Takata, Toru Sunahara, Yoshifumi Kono, Ryoichi Utsumi, Naoko Yuri, Tomoaki Hara, Shunroku Morinaga, Izumi Dan, and Takae Ichinose: Development of a Consistent Curriculum from the First to the Twelfth Grade (6)

即した指導も可能になるであろうとも考えた。

その結果、「読むこと（説明的文章）」の「領域別12か年一貫指導事項表」の中のいくつかの指導事項について検討することができた。

以上のように、これまでの研究を経て、12か年を見通した指導を可能にする枠組みを持つことはできた。だが、それを具体化するには、さらに授業や調査を通しての検証を進めていかなければならない。

(2) 社会（地歴・公民）科

本研究開発では、「自立と共生」というテーマを設定し、(1)自己学習能力の育成、(2)社会の変化への対応力、(3)他者との共存に関わる能力の育成をめざして、具体的な小単元モデルの教材開発を継続して進めてきた。本年次は、とくに「社会的認識」に関わる歴史的分野・科目と公民的分野・科目において、教材開発とその授業実践に取り組んだ。

まず歴史的分野・科目では、高等学校において「政党政治」の教材開発を進め、中等教育研究大会で授業を公開した。「政党政治」は、現代日本の主要な課題であり、未来をどのように切り開いていくか、その展望を得るためにも重要なテーマである。このテーマは、一昨年次からのモデル開発の主題「日本の近代化」に関わる。

第一次大隈内閣で政党政治が始まり、原内閣で本格的政党政治となった。第二次護憲運動以降は、内閣は衆議院の第一党が組織し「憲政の常道」となる。しかし五・一五事件で犬養内閣が倒され、以後軍部主導の政治が展開していく。このような政党政治の歴史的な流れを提示するだけではなく、「こうしたら、こうなった」「こうしなければ、こうならなかった」など「(1)自己学習能力の育成」に関わる学習者の学びの観点を具体化した教材開発であった。また一昨年次においては、教育システムや社会階層の視点から「日本の近代化」を考察させたが、本年次は、原内閣の教育政策が学習内容に含まれ、より深化・充実した教材開発となった。

公民的分野・科目では、中学校において「人権の尊重や人間の尊厳」をテーマに「脳死と臓器移植」の問題を教材として開発し、中等教育研究大会で授業を公開した。このテーマは、一昨年次からのモデル開発の主題「人権」に関わる。

学習内容は、臓器移植法の内容と成立の背景を理解し、臓器移植法の問題点を探るものであった。「(2)社会の変化への対応力、(3)他者との共存に関わる能力の育成」を具体化した教材開発となった。また高等学校の「現代に生きる私たちの課題（現代社会）」や「人間の尊厳や生命の畏敬（倫理）」などに発展させ得る

学習内容であった。

本年次の研究開発は、「将来の日本社会の状況を見据え、学習者の必要性に即応した実践的な教育内容を、深化・充実させていく」という昨年次の課題に十分に答え得るものとなった。今後もさらに、将来の日本社会の状況を見据え、見方・考え方をきたえる実践的な教育内容の研究開発に取り組んでいきたい。

(3) 算数・数学科

1997年度に構想した算数・数学科12年一貫教育課程の基本的枠組みに基づいて、1998～1999年度の2年間は、教育内容の厳選・削減に向けて小・中・高の学校間での学習内容を整理を具体的に検討した。主として、1998年度には「整数の性質」「文字と式」「比例と反比例」、1999年度には「図形」「確率」の扱いを研究した。これらの研究を通して、授業時間数削減の中にあっても学習の充実を実現する「重点化」「弾力化」の意義が明らかになった。「重点化」は、時間的余裕を生み出すことによって、児童・生徒が自らの興味・関心にしたがって主体的な学習することを可能にし、「弾力化」は、児童・生徒の個性に応じた学習を可能にする。

しかしながら、改めて12か年全体の内容を通して見たとき、若干の整理は考えられたものの、基本的には現行あるいは新学習指導要領に示されている内容を大きく改めるものにはなり得なかった。算数・数学科の系統性ゆえに当然のことである。したがって、研究の焦点は重点化・弾力化した内容をどう扱っていくかとなる。そのとき、考えられるべきことが、算数・数学科学習の「総合化」であろう。

1997年度構想の教育課程の中にもすでに小・中・高の各学年に算数・数学総合学習を位置づけていたが、それは①教育目的の総合、すなわち認知面や情意面にわたって自律性やコミュニケーション能力などを総合的に育成すること、②領域間の総合、すなわちいくつかの領域、場合によっては他教科にまたがった学習に取り組めるようにすること、③シチュエーションの総合、すなわち数学と現実場面との総合、の3つの点をめざした総合化された算数・数学科の学習形態である。新学習指導要領によって小・中・高とも総合的な学習の時間が導入されることになったが、その枠の中で、算数・数学中心の教科発展型総合学習として運用することも考えられる。

これまで算数・数学総合学習の実践をいくつか行ってきた。特に統計に関するものとして、「電力問題を考えようーグラフの活用ー（小5・6）」「高校生の生活実態調査ーデータの相関ー（高2）」など、身近なテーマを設定して、調査、整理、発表を行う学習は、他の教科や生活場面と関連させながら、小・中・高そ

それぞれの発達段階、学習経験に応じて児童・生徒が自ら課題を発見、探究するという活力ある学びを生み出すものであった。

(4) 理科

理科における12年(10年)一貫教育課程の研究は、「新しい学力観に立った探究活動の展開」をテーマに掲げ、新しい学力観に関する理論的・文献的研究を行うとともに、小・中・高等学校における探究活動を発達段階あるいは分野ごとにいくつか抽出し、それぞれの事例研究を推進した。その結果、新しい学力観に立った探究活動として、より望ましい理科授業の在り方を見出すことができた。しかし、新しい教材の開発や基礎・基本の育成などに関して、いくつかの問題点も浮き彫りにされた。

小・中・高等学校それぞれにおける事例研究を進める一方では、理科における12年(10年)一貫教育課程の編成に着手した。具体的な教育課程の編成作業としては、第3～6学年(小3～6)において、選択・複線型の授業を視野に入れながら各学年の内容を再検討し、厳選の可能性を探ってみた。一方、第7～12学年(中1～高3)においては、現行どおりの単位数の中で基礎・基本を習得させた上で、いかに探究活動・課題研究のための時間を生み出すか検討してみた。そして、このような検討を積み重ねながら、また、小・中・高等学校の連続性・発展性を考慮しながら、理科における12年(10年)一貫教育課程を試案として編成することができた。

その後、研究テーマを「自ら学ぶ意欲を育てる探究活動」へと発展させ、それぞれの発達段階や分野ごとの探究活動をより広範な事例において検討し、自ら学ぶ意欲の育成、さらには、判断力・思考力・表現力などの育成に注目しながら、小・中・高等学校の接続をより具体的に検討した。

また、12年(10年)一貫教育課程の構成原理をより明確にするために、欧米諸国の科学教育に関して、その成立過程およびカリキュラムの比較研究を行い、これからの理科教育の在り方を探った。その際、サイエンスリテラシーという概念に注目し、その歴史的な背景と今日的な要請を明確にした。

さらに、総合的な学習との関連にも注目し、理科教育においてはどのような資質を培うべきなのかなどに関して検討した。具体的には、総合領域的な内容を各学年で1テーマずつ選定し、事例研究を進めた。しかし、このような内容が理科の教育課程においてどのように位置付けられるのかなど、検討すべき課題がいくつか残されている。今後さらに、理論的・実践的な研究を積み重ねていく必要がある。

(5) 音楽科

本年度の12年一貫音楽科教育課程の開発に関する報告は、この6年間の研究によって明らかになった成果と課題を総括して述べておきたい。本研究の視点は、主に次の2点に集約できる。第1は、小学校・中学校・大学の音楽科教官の合同プロジェクトによって、12年一貫を見通した子どもたちの音楽性の発達と音楽学習の系統性を検討しながら、音楽科カリキュラムの構築を行っている点である。第2は、小中高同一キャンパスという利点を生かして異学年集団による合同音楽学習の実施を試行している点である。

音楽科カリキュラムの構築について

当初より合同プロジェクトは、音楽科の目標を次のように設定している。それは、「子どもたち一人一人に、生涯を通して音楽を愛好し探究することのできる態度と能力を培うこと」である。それにもとづき、12年一貫を通じて情意面・認知面・スキル面に着実な成果が期待できる教育課程を作成することをめざした。それは、校種の違いによる立場意識をなくしながら、現有4名の得意分野を生かしつつ子どものもつ音楽活動への欲求を満たすものであることを重要な視点としながら進めた。小学校課程の試案は、音楽活動の能力の育成を中核としたものであった。中・高等学校課程の試案は、子どもの興味関心に応じた演奏活動を中心としながら、子どもたちの音楽世界をより深く広げていくものであった。両校とも5年に及ぶ様々な実践検証によって、教育課程の妥当性がかなり明らかになった。課題は、授業づくりに関する、より理論的な枠組みを模索し実践検証を重ねながら、確固とした構造をもつ音楽科教育課程へと改善していくことであろう。異学年集団による合同音楽学習について

次に本プロジェクトは、音楽学習の過程に「音楽を通した人と人とのかわり合い」が適切な在り方で含まれていることが、学習の成果として豊かなみりにつながると考えた。異年齢集団による学習は、発達段階の違いが刺激となり活発な相互作用の働きのもと、これまでの同年齢集団における学習にはみられなかった新しい成果をもたらすと考えた。音楽表現活動は、年齢や能力の隔たりを越えた共同での表現が可能である。さらに、その成果を認め合い実感し合えることも割りと容易である。年少者は年長者から新たな知識や技術を学び、年長者は年少者に教えることによってメタ認知的な学びができる。数本の実践検証から、合同音楽学習の有効性をかなり明らかにできた。

(6) 造形科

本年度も、これまでの研究を踏まえ、小・中・高の造形科の教育内容の接続と系統化の見直しを図りなが

ら、さらに教育方法についても検討を行った。

造形指導内容一覧表の見直しを図り、特に「色彩、形態、伝達・機能、総合」の4項目の内容についての妥当性を検討した。

題材設定においては、児童・生徒の発達段階や資質・能力、興味・関心を考慮するとともに、児童・生徒が表現するために、媒介とする色、形、素材に広がりがあり、多様な選択が可能な題材を検討してきた。また児童・生徒の造形的なみかた、感じ方（色彩感覚、形態感覚、材料感覚）、知識、技能を深め高めることができるような題材の系統性を考えた。

さらに本年度は、内容面だけでなく、教育方法についても検討してきた。これまで鑑賞活動は作品を作り終えてから行うことが多く、制作中の課題は個人レベルで解決されていた。しかし表現しっぱなしの活動を繰り返していたのでは、一方的な独りよがりの自己満足の表出となり、他者への無関心を引き起こすと同時に、自分自身の表現を振り返ることも不十分となると考えられる。そこで表現の結果である作品だけに目を向けるのではなく、表現を生み出す過程での「思考する」行為をより意識的に学習の中に取り入れる必要があると考えた。なぜその主題を選択したのか、なぜその表現方法を選択したのかを考え追究する活動を位置付けた。そのさい自分一人ではなく、友達や教師とみかた、感じ方、表し方を交流し、自分の表したいことをより明確にさせたり、より深く追究できるような活動を設定した。こうした活動を通して、自分とは違う「他者」の造形的なみかた、感じ方、表し方の違いを認めたり、よさを分かりあうことのできる鑑賞者としての鋭敏な造形感覚を育てることができる。同時に自らのみかた、感じ方を振り返り、表現をより深く追究することにもつながる。

こうした考えのもと、本年度は表現するうえで重要となる思考過程での追究活動について、それぞれの題材にどのように位置付け、どのような学習形態で、どんな方法で行うべきかを重点的に検討した。

今後も、本研究の成果と課題を活かして実践研究を進めて行きたいと考える。

(7) 家庭科

継続して国際理解を視野に入れた授業をどう家庭科の授業に位置づけるか、現行の学習内容の中でどこで、どのように国際社会を強調していくか、模索しながら実施してきた。

1997年度に教育課程の12年一貫したカリキュラムの編成を試み、4つの領域に再編したが、このたびの新学習指導要領では家庭科の時間数が削減されることになったため、今後さらに指導内容を精選し、教材選定

や指導方法を吟味しながら家庭科独自の小・中・高等学校一貫したカリキュラム編成を実証的に検討する課題を残すこととなった。

1998年度では、授業実践を行い検証にあたった結果、他国の人々と話しを交わし、料理を作るといった交流や、どのように食べるか、その違いを身近に演じる場面を設定した授業の中から、生徒は世界には生活習慣や文化や価値観などにさまざまな違いがあることに気づく第一歩となった。

1999年度は、1つのテーマ「米」を軸にして探求活動を行った。限られた時間の中でどのように展開していくか、授業形態の改善も視野に入れながら試みた。第10学年（高1）で行った「赤米」は「白米」に比べ、その色、歴史的背景、珍しさから生徒の想像力を刺激しやすいと思われる。この実践は家庭科という1教科が行った「高校1年生の総合学習」への支援の試みにもなったが、素朴な疑問や思いつきを検証する程度の調査活動で終わってしまった。家庭科に限らず各教科には、固有の到達目標や時間的な制約があり、十分な広がりを生徒に持たせるには限界があるのも事実であろう。実際、複数の教科が担当する「総合学習」の活動においては、「米」を軸として生徒が設定したテーマは相当な広がりや深さを持っていた。しかし、その発想の裏には、家庭科で学んだ知識や調理実習での経験が生かされていることは確かである。「米」を切り口として、生徒は自分たちの生活に関連する事柄がいかに多様で複雑なものであるか実感することができたであろう。

これからも家庭科の授業を構成するなかで、家庭生活の場から社会生活に目を向ける活動を組み入れ、グローバルな視点での生活課題を追求すべきであると考ええる。

(8) 保健体育科

昨年度までの取り組みにおいて、保健体育科では児童・生徒の心身の発育発達段階を踏まえた教育課程の構築をめざしてきた。

これは、心身の成長と変化が著しいこの時期に、自分自身の体を知ることの大切さを一人ひとりに認識させることが、保健体育科の使命のひとつと考えるからである。

今回の研究においては、「水泳領域」についての12年一貫教育を構築する中で、「泳ぐ」という運動を取り上げながら、その「基礎基本」をどう捉えるのかを研究主題として取り組んだ。具体的取り組みについてはすでに前回で報告した通りである。

小学校の段階での「基礎基本」となる運動技能の獲得は、身体の成長とともに運動能力の開発と深い関わ

りがある。小学校低学年で学習する「基本の運動」や投・走・跳等の基礎的運動の経験は、いろいろな運動・スポーツを展開していく際の理解・獲得に大きな影響を及ぼす。そのため、小学校段階での「基礎基本」の獲得をどのように確立するか、が大きな課題となるのである。

中学・高等学校においては、単に運動技能の習得にとどまらず、そのスポーツの文化史やそのスポーツと政治経済との関わり等、多方面からの知識についても考えさせていくことが大切である。これにより、そのスポーツの理解・興味関心を深めさせることができ、生涯スポーツへの足掛かりをつくる取り組みへと発展させることができる。

この構造的な学びの場を引き出すことがまさに教科発展型の総合学習であると捉えている。また、この構造論・方法論に則って、実際に運動の経験をすることが、これからの保健体育科に求められている「自ら学ぶ」力を育てる取り組みといえよう。具体的には、そのスポーツの発祥に関わる地理的・社会的背景を考えさせたり、ルールの変遷を学ぶことから技術の進歩や変革を学んだりしていくのである。

この取り組みは、生涯体育・生涯スポーツの基本的理念からも、男女共習や選択制授業の在り方についての方向性を導き出すものになってくると考えている。

今後は、小学校の「基礎基本」を踏まえながら、中学・高等学校において生徒の主体的学びの姿をどのように発展させていくのか、について引き続き研究を重ねていきたい。そして、「自分の身体を知り、自分自身や他の人たちの心身の状態についてもそれを個性として尊重していくことができる態度を育成する。」ことを指針に、教科から発進するあるいは教科発展型の総合学習の構築を担っていきたい。

(9) 外国語科

1. 研究の概要

小学校からの英語教育が取りざたされる昨今の教育現場にあって、本校では平成8年度より小学校5年生からの英語教育の実践に取り組んできた。週1時間の実践ではあるが、ALTの協力を得て本物の英語に接する機会を児童に提供してきた。音声を中心にした耳からの学習を基本に据え、コミュニケーションを重視した英語教育を実践してきた。

中学校においてもALTによる授業を実施し、引き続き実践的なコミュニケーションを意識した授業を展開してきた。その精神を尊重して、JTEの授業においても日頃から積極的に英語を使いながら習得させるというスタンスを持ち、従来の英語教育にまして音声重視の教育を心がけた。同時に、「読む・書く」とい

う言語活動にも力を入れ、副教材の活用も可能な限り行った。

さらに、高等学校においては積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を目指して、自分の意見や考えを整理して発表する場を設けるなど、一貫してコミュニケーション重視の英語教育を実践してきた。学習内容が高度になるにつれ、「聞く・話す・読む・書く」の4技能の習得を常にコミュニケーション能力の育成という基本方針のもとに心がけてきた。この点が今回の教育課程開発の主眼である。

2. 今後の課題

12年一貫教育を完全実施するには様々な課題が残っている。最大の課題はその教育の主体となる児童・生徒集団の在り方である。現実には中学校、あるいは高等学校から入学してくる生徒がいる中で、固定した児童・生徒集団を対象に一貫教育を施すことが困難な状況にある。この点については、中途参入の生徒に対する効果的な支援体制を考えていく必要がある。

また、これからの国際社会に生きるたくましい児童・生徒を育成するため、児童・生徒が積極的に英語を活用し、国際交流に意欲的に参加できる機会をより多く提供したいと考えている。そのための環境整備が今後のもうひとつの課題である。

言語能力はまさに生きる力の原点であるという認識のもとに、今後の教育活動に努めていきたい。

II 総合学習開発の試み

〈小学校〉

(1) 附属小学校の総合学習

広島大学附属小学校の総合学習は、(1)人間形成、(2)新しい実践課題への挑戦、(3)新しい学びの形成を目的としている。内容としては、テーマ研究を核にして、次の5分野で構成している。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">① 総合学習の中核をなすテーマ研究② 問いの発生基盤を培い、体験のプール化をめざす自然・社会体験③ 新しい課題に挑戦する情報教育④ 広い社会に向けて活躍する国際理解教育⑤ 国際理解に発信する英語教育 |
|---|

テーマ研究とは、本校総合学習の中核となる領域であり、子ども一人一人が自分自身で問題を設定し、既知の「知」や「学び方」を活用しながら、他領域と深く関連を持ちつつ主体的に課題を追究していく、統括的な学びを生成する学習活動である。この領域には、「異学年集団」と「同学年集団」の2つのタイプの学習形態があり、学年の組み合わせは以下の通りである。

自然・社会体験とは、体験活動そのものを目標として質の高い体験を積み上げることにより、体験のプール化をおこない、新しい問いの発生を促すと共に、学ぶ意欲を育てる学習活動である。

情報教育とは、コンピュータを活用することにより、子どもの主体的・意欲的な情報活用能力を育てる学習活動である。目的に応じた情報収集から、情報選択・決定に至るまでの情報処理能力まで、情報活用能力の育成をめざしているのである。

国際理解教育とは、①世界各地の様々な文化を理解すると共に、地球市民としての自覚をもち、共生の態度を育てること、②地球全体の課題の内容、および課題と自分たちの生活との関わりを理解し、日常生活においてその解決に進んで関わろうとする意識や態度を育てる学習活動である。

英語教育とは、外国の人と意志の疎通を図り、相手の立場を理解していくための学習活動である。

以上の5分野において活動をおこない、教科の活動との円環的發展を促すために位置づけ、実践を積み上げているのである。

(2) 「テーマ研究」の実践（高学年）

ここでは、本年度、第6学年において実施途中にあるテーマ研究「人間」について、その学習活動の計画と経過を述べてみたい。

(1) テーマ研究の体制

テーマ研究の特色の1つに、異学年集団による学び合いがあげられる。その円滑な実施にあたり、年間を通したペア学年として1年と4年・2年と5年・3年と6年の組み合わせによる基礎集団の設定が行われている。時間割編成上も、2つの学年による合同学習が臨機応変に行えるようにとの配慮から、ペア学年の総合学習の時間は同一時間帯に組まれている。

教師の指導は、第6学年の場合、6年に所属する3名とペア学年である3年の教師3名の計6名によるチームティーチングで行う。子どもたちは、6年生4名（男女各2名）3年生（同）の計8名からなるグループ活動を行う。総グループ数は18班となり、一人の教師が3つの班を担当する。

(2) テーマ研究「人間」の単元構成

① 学習活動の計画（総時数28時間）

| | | |
|-----|------------------|--------------------|
| 第1次 | 課題の設定，活動計画立案，活動Ⅰ | |
| | (5月10日～5月31日) | 10時間 |
| 第2次 | 活動Ⅱ | (9月20日～9月22日) 3時間 |
| 第3次 | 活動Ⅲ | (1月31日～2月28日) 13時間 |
| 第4次 | 発表会 | (3月2日) 2時間 |

② 学習活動の方針

テーマ研究の理念にもとづき、子どもたちの自由で独自の追究を保障するとともに異学年集団による学び合いを仕組んでいく。本年度は「人間」をテーマとして、前期には課題の設定、活動計画立案を中心に、後期には研究活動、発表会という流れで進めていく。「人間」というテーマは、一昨年度テーマ「学校」「健康」、昨年度テーマ「いのち」の発展的テーマとしてとらえ提示した。

研究内容は、「人間」というテーマに沿った活動の意味づけがなされていけばよいこととする。つまり、それぞれの班における決定を最優先して進めていく。

(3) テーマ研究「人間」の経過

まだ本単元は、活動の途中だが、実際の活動例を簡潔に紹介しておく。

筆者の担当するA、B、C班は、「他の生物にはない人間の特徴は何か」という問いをスタートとして独自のテーマを設定していった。A班は、「人間同士のふれあい」を追究したいとの思いから「つるの恩がえし」の人形劇に挑戦する。B班は、「人間のまちがいをどう考えたらいいか」という課題から「アンネの日記」の紙芝居に挑戦する。C班は、「人間の体の不思議を調べたい」という思いから「もし目が不自由だったら」についてアプローチする予定である。

いずれの班もテーマの設定には、班内にいる6年生の子どもの既習経験にもとづく提案となった。例えば、「つるの恩がえし」は4年時の音楽科で学習した題材である。「アンネの日記」は日常の読書活動から導かれたものと推測できる。「人間の体の不思議」は2年前のテーマ研究「健康」において学習経験がある。

このことから、テーマ研究の特徴的な意義をここに見いだすことができる。つまりテーマ研究は、教科の学習・日常における学習・過去の総合学習が円環的に発展して生かされる活動の場なのである。子どもたちは、既習事項を自分なりに掘り起こして応用しながら、異学年集団の中で新たな学びを形成していくのである。

(4) テーマ研究「人間」の今後の課題

今後は、単に、活動のみに終始するのではなく、活動の意義の確認、活動の自己評価をさせながら進めることが大切であろう。そのことが、学び方とともに新しい知を形成する「新しい学び」につながっていくと考えている。

(3) 「国際理解教育」の実践（第3学年）

(1) 国際理解教育「留学生と広島を語ろう」の実践
3年生の学習の実態から考えると、社会科はスタートしたばかりで広島市のことを学習している段階。そんな3年生に外国のことを本や資料やパソコンで調べ

でも、知識として身につくだけであり、国際理解教育として学習にはならないのではと考えた。広島に住む児童が、まず国際都市広島（ヒロシマ）をもっと知り、広島の文化や歴史などを直接留学生たちに知らせ、教え、その活動の中で文化の違いを身をもって体験することが学習になるのではなかろうか。広島に住む3年生でも意外と知らない広島のこと。自分たちが住む広島を改めて知ることからこの学習は始まった。

①学習の目標

- 3年生の学力で、広島・ヒロシマについて考え、調べ、まとめ、自分の言葉で留学生たちに知らせる。
- 海外の人達と広島・ヒロシマを語り合うことで、海外の人から見た広島・ヒロシマを知ることができる。
- 留学生に広島に住む3年生の実態を知ってもらい、子供達への願いを基に対話することができる。

②広島調べのテーマ（お店）

広島歴史／戦争と原爆／現在の広島／広島の名物／世界遺産宮島・原爆ドーム／広島の名所／広島の交通／広島の人物／広島の文化や祭り／広島の方言

③広島大学留学生の国と人数

大韓民国／中華人民共和国／インドネシア／フィリピン／トルコ／アメリカ合衆国／ハンガリー／スロヴェニア／ミャンマー／ブラジル／チェコ（計11カ国 23名）

④学習の実際

広島大学のK108教室（移動式机約100席）で、1グループ3～6名の児童はお店を作り模造紙や資料を並べた。留学生の胸には事前に用意した国と名前を書いたネームをつけてもらい入場。児童は呼び込みを始め1～2名の留学生を前に練習した広島の紹介発表を始めた。店に行くときネームの裏にシールを貼ってもらえるのだ。この店で対話も大変有意義であった。

(2) 成果と課題

最初は照れていた児童も慣れてくると手振り身振りで対話をし、呼び込みも活発になってきた。頭を寄せて話している様子は留学生が日本語を少し話せるとは言え、言葉の違いを感じさせないものであった。小学校での発表練習で気になっていたことは、言葉をどのように説明するか、文化の違いや言葉を3年生の少ない語彙力でどのように質問するかということだった。例えば「広島菜の『菜』をどう説明する」や「明治、大正、昭和、平成をどう説明する」など。また文化面では「中国でネズミを食べると言うのが本当か」に対してはなぜそれを聞きたいのか、その質問の答えを聞いて自分の意見をつなげることをアドバイスした。「日本ではネズミを食べないがどんな料理方法があるのか。おいしいのか。」のようにである。「あなたの国は大変

貧乏そうだが……」という質問はメディアの問題点を指摘したい。児童が目にするのは災害や事件などのテレビ報道が多く、その場面がその国の全てのように感じている児童が多いことである。

また、「あなたの国は平和か。平和公園のようなものはあるか。あればどんなものか。」や「日本人が怖いと言ったせりふをテレビ番組で見たが、皆さんはどう思っているか。」など、ヒロシマや平和について核心をついた質問も出た。それらに対して、「真珠湾攻撃」「南京大虐殺」「民族解放」など3年生にはまだ理解ができない歴史的な出来事や言葉も出て来た。しかし、児童の平和問題についての一方的な考え方（被害者意識）に対して振り返る機会を得たように感じる。

店を開くという3年生レベルの学習であったが、外国の人から直接に話をしたり思いを聞いたりするという大変有意義な学習になったと感じている。実際に体を乗り出してメモを取りながら話を聞いている子もいて、このような体験から、知識だけでなく感性も育ち、児童は大きく成長できたと思う。

(4) 「自然・社会体験」の実践（低学年）

ここに報告するのは、「自然・社会体験」の実践例である。但し、広島大学附属小学校の場合、総合学習の学習集団を、1・4学年、2・5学年、3・6学年の三つに分けて固定的に組織しているので、低学年の実践例と言いながらも、1・4学年のそれである。

単元名は「昔の遊びをしよう②—戸外遊び—」である。通し番号が②となっているのは、先（6月13日と6月16日）に実施した「昔の遊びをしよう①—室内遊び—」に続く学習であることに因る。

学習のねらいは、「昔から親しまれてきた『遊び』を知り、それを日頃の遊びの中に取り入れ、遊びの種類を増やす」とことと、「班のみんなで協力したり工夫したりして、『伝承遊び』を楽しく行う」ことの二つである。

「昔から親しまれてきた『遊び』を、「昔はよくなされていたが、最近では日常的な遊びとしてはあまり見かけなくなった『遊び』と解釈し、「石けり遊び」「陣とり遊び」「ビー玉遊び」の三つを取り上げた。これらはいずれも独り遊びではなく集団による遊びであり、子どもたち相互が関わり合いの場を持つことができるものばかりである。また、大掛かりな道具や固定的な施設を要しないことから、子どもたちの日ごろの遊びの中に取り入れやすいとも考えた。

配当時間は8単位時間である。その配分を次のように計画した。（〈 〉の中が単位時間数。）

10/6(金)〈2〉：オリエンテーション、石けり①

10/10(火)〈1〉：石けり②
 10/13(金)〈2〉：陣とり①，陣とり②
 10/17(火)〈1〉：ビー玉①
 10/20(金)〈2〉：ビー玉②，活動を振り返って

「オリエンテーション」を通して子どもたちは、前回の学習（昔の遊びをしよう①—室内遊び—）を思い起こし、今回はそれに続く学習であることを理解した。また、日頃の自分たちの戸外遊びを振り返った後、昔（教師が小学生であった頃）の戸外遊びの話聞くことによってその違いを認識した。さらには、この単元の学習計画を知り、今後の学習の見通しを持った。

三つの遊びを体験する時間は6単位時間である。そこで、それぞれの遊びにつき2種類以上を紹介した。

まず「石けり遊び」では、地面に描く図を2種類示した。子どもたちはそれにとどまらず、その派生型を描いた遊んだ。「陣とり遊び」（別称「うずまきジャンケン」）でも同様に、自陣から敵陣に至るまでの道筋として基本型の「うずまき型」を示し、これにこだわらず、さまざまな形を工夫して遊ぶことを示唆した。「ビー玉遊び」では、投げたり目の高さから落としたりして標的（他のビー玉、円の中、穴）をねらう遊びを紹介した。時間を忘れて遊ぶ子どもたちの姿を見ると、いずれも歓迎して迎えられたようである。

現在、広島大学附属小学校が実施している「総合学習」の中の「自然・社会体験」の目標の一つは、「体験のプール化」である。つまり、「体験を何かを学ぶ手段として考えるだけでなく、体験そのものにも価値を見だし、体験のプール化を図ろう」というのである。

以上、概要を報告した「昔の遊びをしよう②—戸外遊び—」の場合も、十分にその目標を達成し得る内容であった。そのことは「活動を振り返って」の時間に書いた子どもたちの作文からも窺える。

〈中学校・高等学校〉

(1) 領域の設定

1998年度から広島大学附属中学校・高等学校において総合学習を本格的に実施するにあたり、その柱立てとして「国際理解」、「情報」の2つを設定し、学年、実施時期について、校内の施設や内容のバランスを配慮して配置した。2つの柱は、1985年度から1987年度までの研究開発や、その後学校設定科目として実施してきた「国際理解」、「数理科学」などをベースに、さらに社会情勢などを考慮して設定したものである。もちろんこの柱は大まかなものであって、環境、福祉その他、現代社会で重要と考えられる新しいテーマを扱うことを制限しようとするものではない。これまでの本校教

育研究の蓄積を生かしながら、新たに考えられる様々なテーマを積極的に扱っていくことは当然期待されたことであったが、様々なテーマの乱立は負担を増大するばかりで混乱を招く可能性が強く賢明でないと判断し、2つの柱の中で柔軟な扱いをしていくことにした。

また、1998年度の総合学習を実施する中で、教科と総合学習の関連はどうあるべきかも考究し、総合学習は経験、体験、生活をベースにした学習であるという一つの捉え方がなされた。中学生、高校生といった年齢、発達段階を考慮していくとき、1999年度からは領域の設定には必ずしもこだわらず、教科から発展した内容で編成された総合学習や、特別活動との関連が強い総合学習も、自然発生的に設定され、実施することとなった。

(2) 実施形態

授業時間数については、研究開発学校に指定されていた1999年度までは、教育課程表でも各学年週2時間の授業時間を確保していた。しかし、各教科授業時間へのしわ寄せ、毎週の実施はなじまず集中的に実施する方が好都合なケースなどが課題となり、また時間割編成上の都合もあって、2000年度では中学校各学年では毎週実施と集中実施の併存、高等学校では集中実施とした。いずれも総時数は、ほぼ週1～2時間実施の場合に相当する程度としている。

また、全教官で総力を挙げて総合学習を実施していくためにも、当初からそれぞれのテーマが10～20時間程度で区切りをつけられるようすることを基本とし、主に各学期ごとに内容を入れ替えるような分担としている。内容を入れ替えることは、コンピュータルームの使用頻度を適切に維持するためにも必要であった。そして、生徒の実態を十分把握できるようにするためにも、実際の担当者はホームルーム担任や教科担任を中心に、内容の特性に応じて分担した。

(3) 実施計画

1998年度から2000年度までの3年間に実施した総合学習の内容・形態は、表1～3の通りである。個々の具体的な内容の詳細については、紙幅の都合で割愛する。

(4) 成果と課題

総合学習のねらいは、従来の教科学習では対応しきれていない新しい内容や、教科の狭間にあるために再考が求められてきた内容にも対応すると同時に、変化の多い社会に生きる新しい学びのあり方も追求して、学びの意義や魅力を再生し、学びの総合化をはかることであろう。これは、総合学習の時間の中だけで考えられるべきものではなく、教育課程編成の全体の中心課題として捉えられなければならない。

しかしながら、教科をまたがった内容再編等の研

表1 1998年度 総合学習

() 内は担当教員数

| | 1 学期 | 2 学期 | 3 学期 |
|----|---|--|---|
| 中1 | 「国際理解」 —テーマ研究— 週1・学年 国(1)社(2)美(1)英(1) | 「情報」 —コンピュータの基礎— 週1・クラス 数(3)理(2)美(1) | 「国際理解」 —ヒロシマ・演劇を鑑賞して— 集中・学年 国(1)理(1)体(1)中1担任 |
| | 「国際理解」 —英会話— 週1・クラス 英(3)ネイティブ(3) | 「国際理解」 —英会話— 1学期に同じ | 「国際理解」 —英会話— 1学期に同じ |
| 中2 | 「国際理解」 —テーマ研究— ・ポスターセッション他— 週2・学年 国(1)社(2)音(1)英(2) | 「情報」 —コンピュータの活用— 週2・クラス 数(2)理(1)体(1)技(1) 家(1) | 「国際理解」 —環境・リサイクルを考える— —ヒロシマ・演劇を鑑賞して— 集中・学年 国(1)理(1)体(1)中2担任 |
| | | | 「国際理解」 —英会話— 週1・クラス 英(3)ネイティブ(3) |
| 高I | 「情報」 —コンピュータの基礎と活用— 週2・クラス 国(2)数(3)理(2)音(1) 美(1)家(1) | 「国際理解」 —テーマ研究— 週2・クラス 国(2)社(2)書(1)英(3) | 「数理科学」 —サッカーボールと正多面体— 「国際理解」 —国際人として生きる— 集中・学年 数(1)理(1)体(2)英(1) 高I担任 |

表2 1999年度 総合学習

| | 1 学期 | 2 学期 | 3 学期 |
|-----|---|--|--|
| 中1 | 「国際理解」 —留学生を通じた国際交流— 週1・学年 社(2)数(1)英(1) | 「情報」 —コンピュータの基礎— 週1・クラス 数(1)理(2)音(1)体(2) | |
| | 「国際理解」 —英会話— 週1・クラス 英(3)ネイティブ(3) | 「国際理解」 —英会話— 1学期に同じ | 「国際理解」 —英会話— 1学期に同じ |
| 中2 | 「国際理解」 —グループごとのテーマ研究— 週2・学年 社(1)数(1)理(2)体(2) | 「情報」 —中学生の主張他— 週2・クラス 国(1)数(2)美(2)体(1) | 「国際理解」 —英会話— 週1・クラス 英(3)ネイティブ(3) |
| 中3 | 「情報・数理科学」 —文字を飾ろう— 週1・クラス 数(1)美(1)書(1) | 「国際理解」 —世界を考える— 週2・学年 社(2)英(1)家(1) | |
| | 「国際理解」 —英会話— 週1・クラス 英(3)ネイティブ(1) | 「国際理解」 —英会話— 1学期に同じ | 「国際理解」 —英会話— 1学期に同じ |
| 高I | 「情報」 —環境を中心にした課題研究— 週2・クラス 国(2)社(1)数(2)理(3) 音(1)技(1) | 「国際理解」 —米から考える(高校生の自主研究)— 週2・学年 国(1)社(3)理(1)英(1)家(1) | |
| 高II | 「教科発展(英語中心)」 —留学生との交流他— 週1(集中)・クラス 英語科 | 「教科発展(数理科学)」 —身近な統計— 週1(集中)・クラス 数学科 | |
| | 「特別活動関連」 —これが北海道だ!— 週1・学年 高II担任(5)社(2) | 「教科発展(国語中心)」 —自己実現のために— 週1(集中)・クラス 国語科 | |

表3 2000年度 総合学習

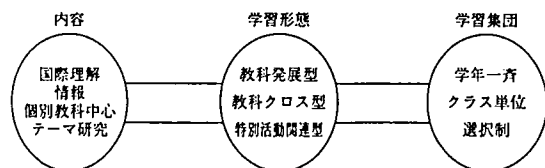
| | 1 学期 | 2 学期 | 3 学期 |
|----|--|--|--|
| 中1 | 「特別活動関連」 —似鳥研修に関連して— 特設・学年 中1担任(6) | 「情報」 —コンピュータの基礎— 特設・クラス 国(1)社(2)数(1)技(1)家(1) | |
| | 「国際理解」 —英会話— 週1・クラス 英(3)ネイティブ(3) | 「国際理解」 —英会話— 1学期に同じ | 「国際理解」 —英会話— 1学期に同じ |
| 中2 | 「情報」 —コンピュータの活用— 週1・クラス 国(1)社(2)理(1)音(1)書(1) | 「国際理解」 —テーマ研究— 週1・クラス 国(1)社(1)体(1)英(3) | 「国際理解」 —英会話— 週1・クラス 英(3)ネイティブ(3) |

| | | | |
|-----|---|--|--|
| 中3 | 「教科発展（保体中心）」 —オリンピックに学ぶ— 特設 保健体育科 | 「教科発展（理科中心）」 —発明工夫展への取り組み— 特設 理科 | |
| | 「国際理解／数理科学」（選択） —英会話、コンピュータ他— 週1・選択クラス 英(1)ネイティブ(1)数(2) | 「国際理解／数理科学」（選択） —英会話、コンピュータ他— 1学期に同じ | 「国際理解／数理科学」（選択） —英会話・コンピュータ他— 1学期に同じ |
| 高I | 「情報」 —電子メールの利用— 特設・クラス 国(1)社(2)数(5)理(1)英(1) | 「教科発展（芸術中心）」 —技と匠を訪ねて— 特設 芸術科 | |
| 高II | 「教科発展（英語中心）」 —留学生との交流— 特設・クラス 英語科 | 「特別活動関連」 —現代社会と自分の進路研究— 特設・学年 高II担任(6) | |

究は、従来の体制ではほぼ困難なことであった。国際理解領域として実施された「世界を考える」「米から考える」、情報領域として実施された「文字を飾ろう」など、あるテーマに対していくつかの教科から様々なアプローチをするという形態で、教科クロス型総合学習として実現したのは画期的であったと考えてよい。

ただ、このような総合学習を計画し、準備していくことは相当な負担が伴う。総合学習の実施にあたっては、内容、学習形態、学習集団など、様々な観点において、様々な方式、様々な組み合わせが考えられ、それらをどうするかという点に関心が向けられがちになる。これまでの実践を整理してみると、下図のように示すことができよう。しかしながら、単純に分類できるものではない。これらの要素を濃淡の差をつけながら、複合的に組み合わせて実施してきていることになる。

図1



本研究においては、単に中学校・高等学校の総合学習を開発するだけでなく、小学校・中学校・高等学校12年一貫教育としての総合学習を開発することが課題であった。その点を考えるとき、接続ある総合学習の開発が十分に検討できたとは言いがたいが、社会からのニーズも高く、教科クロス的な内容で構成される「国際理解」と「情報」に関しては、児童・生徒の発達段階を考慮した12年間のカリキュラム案を作成してこれをベースに実施することができた。

これらに加えて、「テーマ研究」を各学年で実施してきた。図1では内容・領域の中にテーマ研究をあげているが、本来これは国際理解や情報などと並列する総合学習の一つであるというよりも、新しい学びのあり方を追求する総合学習の本質だと捉えるべきである

う。ただ、具体的なテーマを思いつきで設定してしまうことがあってはならず、系統性、一貫性が求められる。教科発展型総合学習として実施されることが多くなれば、内容は各教科の教育課程に依存していくことになる。また、ホームルーム活動などで行われてきた進路学習、平和学習などをよりいっそう深めていく形態では、特別活動の教育課程と密接に関連していくことになる。本来、総合学習は既存の教科学習や特別活動と排他的なものではなく、補完的なものである。学問体系に基づいた各教科教育課程を中心とした学校全体の教育課程の中で、「テーマ研究」は児童・生徒の発達段階や社会のニーズ等を考慮しながら、小学校・中学校・高等学校を一貫していく総合学習の形態として注目すべきあり方だといえよう。

おわりに

本年度は、各教科の研究報告に加えて、総合学習について小学校、中・高等学校それぞれの実践に基づいて研究を報告することができ、これでひとまず12年一貫教育課程について、全教科並びに総合学習のそれぞれの立場からの検討を一通り終えることができた。

6年間にわたって行ってきた本研究も、本年度でひとまず終結となる。小・中・高の12年間という長い期間を見通して、全教科に加えてさらに総合学習までもという広い範囲を対象にした教育課程研究を行うという、他に例を見ない無謀ともいえるほどのスケールをもった研究であった。十分な研究成果をあげたとはとてもいえないにしても、一人一人の児童・生徒が12年間の学校教育の中で何をどう学んでいくのか、教育課程をあらゆる面から総合的に考え研究するという、発想は単純でありながら研究には多くの困難を伴う、しかしながらこれからの教育のあり方を考える上では必ず考えていかなければならないテーマを手がけたという点では、評価されるものと考えている。

今後も各教科、科目、領域等での教育課程研究はさらに進められていくことになるが、本研究で得られた新しい視点を是非とも生かしていきたい。